

# 「デジタル・バスター」

— 2稿 —

2026/3/29

米俵

〈人物表〉

空木 律希

(13)

中学1年生

空木 顕真

(45)

寺の住職・律希の父

九条 戒

(36)

顕真の友人

1. 空木家・本堂（朝）

静寂の中、木魚の音だけが一定のリズムで響く。  
差し込む朝日。黄金の仏像が神々しく輝く。

空木顕真（45）、木魚を叩きながら読経している。

2. 空木家・本堂廊下（朝）

黒光りする柱。床板は数百年の伝統を感じさせる。

空木律希（13）、足音を響かせて歩いてくる。最

新のタブレットを片手に、首からヘッドホン。

律希、舌打ち。

律希 「おい、親父。また三つ死んでんだけど」

3. 空木家・本堂（朝）

律希、ズカズカと入ってくる。

そのまま顕真の後ろに横になる。

律希 「また、ロード中。仏像が干渉でもしてんの？」

顕真、無視して読経を続ける。

律希 「オフラインとか、まじ人権ないわ」

ヘッドホンをつけ、

律希 「ノイズキャンセル」

そのまま目を閉じる。

すぐに寝息が聞こえ始める。

× × ×

静寂。

顕真、律希のヘッドホンを取り上げ、

顕真 「律希」

律希、嫌々目を開けて、

律希 「んあ？ 終わった？」

律希のタブレットが鳴る。

（画面）桃香「除霊できる男子って凄くない？」

律希、飛び起きて、タブレットをいじる。

顕真に、画面を突き出して、

律希 「親父、これ、考えてくれた？」

顕真、チラッと見る。

タブレット画面には、「デジタルで除霊」「すぐ身に付けられる」の文字と共に九条戒（36）がポーズを取っている。いかにも怪しい広告。

律希 「修行とか、非効率過ぎだろ？」

顕真 「根を張らぬ木に花は咲かない」

律希、溜息。

律希 「親父のOS、ガチで木造だろ」

顕真、律希の目を見る。

顕真 「……積み重ねは馬鹿みたいか？」

律希 「だね。令和にアプデしないと」

少しの間。

顕真 「……好きにしろ」

律希、ニヤッと笑って、

律希 「この寺も6Gに対応させるから。俺に任せて」

顕真 「おい。掃除は？」

律希 「ロボで！」

と、笑顔で駆け出していく。

顕真、律希の背中を見送る。

#### 4. タワーマンション・室内（昼）

白い大理石が敷き詰められた広大なリビング。正面の壁は、巨大な高精度LEDパネルに覆われ、リアルタイムの空が映し出されている。他にも最新機器が揃い、近未来な雰囲気。お掃除ロボットも稼働中。

ドアが開き、律希が入ってくる。

立ち尽くし、部屋を見渡す。

部屋のモニターに、「KAI Interface CEO / デジタルバスター/Architect九条戒」と映し出される。

律希 「（小声で）デジタルバスター……」

奥の部屋からラフな恰好の戒が現れる。

戒、柔らかな笑顔で、

戒 「律希くんだね。連絡ありがとう」

青く照らされたシートが上がってくる。

ロボットが椅子まで律希を誘導する。

律希、恐る恐る近づき、腰かける。  
戒 「そんなに緊張しなくていいからね」

律希、安心した表情。肩の力が抜ける。

戒 「今回は、デジタル除霊の習得だね」

律希 「はい！」

戒、椅子の拘束ベルトを手に取り、

戒 「修行つてさ、効率悪いでしょ」

律希 「ですね。毎日掃除しろとか、一万回お経唱えろとか」

戒 「お父さんに言われる？」

律希 「なんで分かるんすか？ほんとバグレベルですよ」

戒、ベルトで律希の体を固定する。

戒 「人間、最短距離でいけるなら、それが正解だよね」

と、笑顔でベルトをきつめに締める。

律希 「えっ、あっ、これって……」

戒 「大丈夫。演出みたいなものだから」

と、にっこりと笑う。

タブレットを操作して、

戒 「早速、ショートカットしていこうか」

律希の周りに大量のモニターが現れる。

ヘッドホンが強制的にはめられ、音が遮断される。

律希、驚いた表情。

ヘッドホンから、戒の声が聞こえてくる。

戒の声 「じゃあ、今からノイズを削ぎ落した除霊プログラムをイ

ンプットするから」

戒、タブレットのフェーダーを上げる。

律希のヘッドホンからは高周波の電子音が流れる。

モニターに意味不明な英単語や記号が高速で流れる。

戒の声 「モニターの文字を目で追ってね」

律希、必死で文字を追う。

律希 「えっ、こんなんで……いいんですか？」

戒 「そうだよ。君のレベルにチューニングしてあるからね」

戒がタブレットを操作。椅子の温度を上げる。

律希 「やば……なんか、熱くなってきた気がする」

戒 「いいね。アプデ出来てるよ。律希くん、才能あるな」

戒、タブレットで、椅子の角度を操作。

律希、体の力が抜け、座席に深く沈み込む。

律希から笑いが漏れる。

律希 「まじか。すごっ。こんなんでもいいのかよ」

戒、律希の様子を確認して、

戒 「最後に、ベースを流すから」

律希 「ベース？ なんすか？」

戒、律希の言葉を無視。タブレットを軽くなぞる。

ドクンと心臓を直接掴まれたような重低音。

戒がボタンを押す。

律希の体が跳ねる。

強烈な重低音が続き、椅子が高速回転する。

律希、苦しそうな表情。

戒 「あー、いいとききてるね。あと少し」

椅子の動きが更に激しくなる。

だんだんと音が小さくなり、回転も止まる。

戒、律希の拘束をはずしながら、

戒 「お疲れ様。大丈夫だった？」

律希、フラフラと立ち上がる。

律希 「最後のだけちよっとキツかった……っすけど」

戒 「体、どんな感じ？」

律希 「正直、まだよく分かんない……です」

戒 「じゃあ、試してみようか」

と、部屋の隅を指さす。

黒い物体が動く。

律希 「うわっ。きもっ」

戒 「低級な霊だよ。手をかぎしてみて」

律希 「手？ アナログじゃないっすか」

戒 「やれば分かるよ」

律希、面倒くさそうに手をかぎす。同時に戒がタブ

レットを操作。

パンという音とともに物体がはじける。

律希 「は？ えっ」

と、自分の手を確認する。

戒 「おめでとう。ミッション成功だ」  
律希 「これだけ？ デリート余裕かよ」  
戒 「ほら、また出てきたよ」

少し大きめの物体が動く。

律希、手をかぎす。戒、タブレット操作。  
物体、飛び散る。

が、すぐに元に戻り、巨大化していく。

律希、余裕の笑みで手をかぎす。

何も起きない。

律希、何度も手をかぎす。

大理石の床からドロリとした粘着質な影が溢れ出す。

戒、興味深そうに見ている。

不穏な音が響き、壁面のLEDにヒビが入り、赤黒く染まる。

律希 「えっ、なんすか？」

戒 「おかしいな。招かれざる客かな」

部屋のアラート音が鳴り始める。

律希 「戒さん！」

戒、タブレットを一瞥して、冷静に、

戒 「低級霊のバックに重いのがついてたみたいだ」

巨大化した物体の一部が弾け、律希の首に張り付く。

律希 「うわああ」

と、尻もちをつく。

首元を拭き取ろうとした律希の手が黒く染まる。

律希 「なんだよ、これ。キモいキモい」

戒 「あー。感染してるね」

律希 「戒さん、助けて」

戒、口角を上げて、

戒 「仕方ないな。もう一度腰かけて」

律希、這うように、椅子まで辿り着く。

戒 「強制的にフルスクリーンを実行しようかと、タブレットを操作。」

強固なアームが律希の頭部と四肢の自由を奪う。

律希、苦しそうに、

律希 「これ、きついつす」

戒、優しく微笑みながら、

戒 「今回は暴れると大変なことになるからね。そのぐらいは我慢して」

律希、表情が強張る。

戒 「瞬きはしないようにね。網膜経由でリンクするから」

律希、怯えた様子で、急いで目を見開く。

戒、タブレットに書かれた台詞を読む。

戒 「デジタル・エクソシズム、最大出力。デリート開始」

戒、タブレット画面のバーを上げる。

高周波の読経リミックスが爆音で部屋中に流れる。

律希の前のモニターには、マンダラが高速で流れる。

律希、必死でマンダラを目で追う。

律希の体が、椅子ごとガタガタと震えだす。

律希 「頭が痛い。目が……ピリピリする」

椅子からエラー音が鳴る。

椅子の側面から冷却ミストが断続的に吹き出す。

律希、顔をそむけ、咳込む。

戒 「あーダメだ。パケットが詰まってる状態だな」

律希 「アップデしたんじゃないんすか？」

戒、タブレットの台詞をスクロールしながら、

戒 「君のフィジカルとメンタルの問題かな。このままだとオ

ーバーヒートして、物理的に廃人コースかもなー」

律希の見開いた目は充血。渴いた目から涙が出る。

律希 「詰みじゃん……」

壁の「E」パネルが激しく火花を散らし、アラート音

がどんどん大きくなる。

律希の足元に黒い物体が絡みつく。

律希 「なんだよこれ。親父、助け……あー、くそっ」

戒 「あれ？ お父さんのOS古いんじゃないかった？」

律希、戒を睨む。

戒、笑顔でタブレットを操作。

律希の拘束が解かれる。

律希、思い出しながら、手で印を作り、

律希 「りん……ぴょう」

止まる。言葉が続かない。

律希 「続き……続きなんだよ。親父い」

手が震え、呼吸が早くなる。

律希 「りん、ぴょう……とう、しゃ」

指が絡まる。

律希、悔しそうな表情。

椅子のひじ掛けを強く掴む。

呼吸を整える。

叫ぶように、

律希 「南無阿弥陀仏。南無阿……んあああ」

律希、力尽き、口から黒いものを吐き出す。

同時に全モニターが落ち、黒い物体も一瞬で消える。

ロボットが戒の元へコーヒーを運んでくる。

戒、少し笑って、

戒 「混ぜってんだよねー」

戒、ゆっくりと飲む。

## 5. 空木家・本堂(夕)

夕日で照らされる本堂。

律希、お経を唱えながら無心に柱を磨いている。

## 6. 空木家・木の影(夕)

顕真、律希の方を見ながら、戒に封筒を渡す。

戒 「どうも」

すぐに、中身を数え始める。

戒 「律希がまだ素直で良かったわ」

顕真 「……ああ」

戒、思い出したように、

戒 「ってか、あんな重いもの送ってくるなら言っといてよ」

顕真 「律希か？」

戒 「違う違う。感情の重いやつ」

顕真 「ん？ 何のことだ？」

戒 「え？」

顕真 「ん？」

戒 「まじかよ」

戒、本堂の仏像の方を見る。

7. 空木家・本堂(夕)

夕日で照らされた仏像が微笑んだように見える。

(おわり)